

[D年] 聖霊降臨節第12主日(2020年8月15日)**【旧約聖書日課】士師記 6章36～40節**

³⁶ギデオンは神にこう言った。「もしお告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっているなら、³⁷羊一匹分の毛を麦打ち場に置きますから、その羊の毛にだけ露を置き、土は全く乾いているようにしてください。そうすれば、お告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっていることが納得できます。」

³⁸すると、そのようになった。翌朝早く起き、彼が羊の毛を押さえて、その羊の毛から露を絞り出すと、鉢は水でいっぱいになった。³⁹ギデオンはまた神に言った。「どうかお怒りにならず、もう一度言わせてください。もう一度だけ羊の毛で試すのを許し、羊の毛だけが乾いていて、土には一面露が置かれているようにしてください。」⁴⁰その夜、神はそのようにされた。羊の毛だけは乾いており、土には一面露が置かれていた。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 5章1～5節

¹イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。²このことから明らかなように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。³神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません。⁴神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。⁵だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

【福音書日課】ヨハネによる福音書7章1～17節

¹その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった。²ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。³イエスの兄弟たちが言った。「ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。⁴公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。」⁵兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。⁶そこで、イエスは言われた。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。⁷世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。⁸あなたがたは祭りに上って行くがよい。わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。」⁹こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

¹⁰しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた。¹¹祭りのときユダヤ人たちはイエスを捜し、「あの男はどこにいるのか」と言っていた。¹²群衆の間では、イエスのことがいろいろときさやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。¹³しかし、ユダヤ人たちは恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

¹⁴祭りも既に半ばになったころ、イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた。¹⁵ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と言うと、¹⁶イエスは答えて言われた。「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。¹⁷この方の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

士師記 6章36～40節

³⁶ギデオンは神に言った。「もしお告げになつたように、私の手によってイスラエルを救われるというのでしたら、³⁷私は羊一匹分の毛を麦打ち場に置きます。もしその羊の毛にだけ露が降りて、地面が乾いているのであれば、お告げになつたように、私の手によってイスラエルを救われるということを納得いたします。」³⁸すると、実際そのようになった。翌日、朝早く目覚めたギデオンが羊の毛を絞ると、露が流れ出て、鉢が水でいっぱいになった。³⁹ギデオンは神に言った。「どうかお怒りにならないでください。もう一度だけ言わせてください。ぜひとも、もう一度だけ羊の毛で試させてください。羊の毛だけは乾いていて、地面には露が降りるようにしてください。」⁴⁰すると、神はその日の夜、そのようにされた。羊の毛だけは乾いており、地面には露が降りていた。

ヨハネの手紙一 5章1～5節

¹イエスがキリストであると信じる人は皆、神から生まれた者です。生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。²神を愛し、その戒めを守るなら、それによって、私たちが神の子どもたちを愛していることが分かります。³神の戒めを守ること、これが神を愛することだからです。その戒めは難しいものではありません。⁴神から生まれた人は皆、世に勝つからです。世に勝つ勝利、それは私たちの信仰です。⁵世に勝つ者とは、イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

ヨハネによる福音書7章1～17節

¹その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうと狙っていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかった。²時に、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。³イエスの兄弟たちが言った。「ここをたつてユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。⁴公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世に現しなさい。」⁵兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。⁶そこで、イエスは言われた。「私の時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。⁷世はあなたがたを憎むことはできないが、私を憎んでいる。私が、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。⁸あなたがたは祭りに上って行くがよい。私はこの祭りには〔まだ〕上って行かない。私の時がまだ満ちていないからである。」⁹こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

¹⁰しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、人目を避け、ひそかに上って行かれた。¹¹祭りのときユダヤ人たちは、「あの男はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。¹²群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。¹³しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

¹⁴祭りもすでに半ばになった頃、イエスは神殿の境内に上って行き、教え始められた。¹⁵ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と言うと、¹⁶イエスは答えて言われた。「私の教えは、私のものではなく、私をお遣わしになった方のものである。¹⁷この方の御心を行おうとする者は、私の教えが神から出たものか、私が勝手に話しているのか、分かるはずである。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

- ・8月16日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は、「信仰による勝利」。
- ・「信仰」は、聖書全巻を貫く主要テーマであるが、「信仰／信じる」と訳される語の用例は、圧倒的に新約が多い。旧約で「信仰／信じる」と訳される原語（ヘブライ語）は一般に「アーマン」で、「アーマン」と同根の語である。一方、新約で「信仰／信じる」と訳される原語（ギリシア語）は一般に「ピステイス／ピステウオー」で、新約全体で広く出てくる。
- ・旧約と新約を「信仰」の語で結びつける接点の一つは、創世記 15:6「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認めた」で、パウロが自身の信仰論を述べるに際して引用している（ローマ 4:3）。
- ・主イエスの言説において神と人との関係が教えられるときに鍵語となるのは「愛する」であり、申命記 6:4~5「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」というユダヤ会堂で典礼文として定式化されている聖句が主イエスによって「もっとも重要な教え」として認識されていたことが共観福音書に伝えられている（マタイ 22:37、マルコ 12:29、ルカ 10:27）。共観福音書の用例では、「神を愛する」が「神を信じる」ことを意味する表現として用いられており、「隣人を愛する」という表現には「隣人を信じる」という意味合いが含まれていると考えられる。一方で、ヨハネ福音書では、「愛／愛する」と「信仰／信じる」の用法は、共観福音書と異なり、「愛」がもっぱら、神から人に向けられた行為、あるいは人から人に向けられた行為を意味する用語として用いられるのに対して、「信仰」は人が神、あるいはイエスに対して信頼を置く態度を表す用語として用いられている。これらは別個の事柄というよりは、「愛」の働きかけに対する応答としての「信」という関係、さらに、「信」に基づく「愛」の行動、ということが想定されているのだろう。
- ・「信仰」に関連して「勝利／打ち勝つ」という表現が用いられるのは、もっぱらヨハネ文書（ヨハネ福音書、ヨハネの手紙）においてである。もっとも、日本語で「信仰の勝利」と表現されるときにイメージされる「信仰を持つことによって（この世の困難な事柄に）勝利する」という意味で取り上げられるわけではない（もちろん、そのような信仰観が新約全体の中で見られないわけではない）。

旧約日課（士師記 6章より）

- ・「士師記」は、ユダヤ教正典では「前の預言者」の第二巻として位置づけられ、モーセによってエジプトから導き出されたイスラエルの民が後継指導者のヨシュアによって約束の地カナンに入植したことを物語る「ヨシュア記」と、その地で「イスラエル」として一体化した王国を形成した時代を物語る「サムエル記」の両書を

橋渡しする「イスラエル正史」の一部として編纂・編集されている。ただし、「ヨシュア記」や「サムエル記」と比べると多くの雑多な伝承の寄せ集めという側面が強く、ヨシュアの時代とサムエル・サウルの時代を「史的」につなぐためだけに採用された伝承がある一方で、他とバランスを欠いた分量で伝えられている伝承も含まれる。

- ・「士師」の原語（ヘブライ語）は「シヨフェティーム」で、古代オリエント世界で「支配者」を意味する共通の語に由来する一般的な語であるが、旧約では永続的・世襲的に支配者として君臨する「王（メレク）」と区別するために用いられている。「士師記」には、12人の「士師」が登場し、イスラエル諸部族が共通の外敵に立ち向かうために立てられた軍事指導者である場合もあるが、そのようには描かれない場合もある。それらの「士師」の中で比較的多くの分量を割いて物語られるのが「ギデオン」と「サムソン」で、「士師記」は両者を典型的な「士師」の代表と見ているのだろう。
- ・「ギデオン」は、マナセ族出身の士師で、外敵ミディアン人の侵略に抗してイスラエル諸部族から精鋭を選抜して闘い、勝利した。日課箇所は、精鋭を選抜する直前に、士師として神から召されたことをギデオン自身が確かめるために、神に「しるし」を求めた場面である。
- ・「ギデオン」の物語は、6章から8章まで続くが、9章もギデオンの息子アビメレクの物語であり、ギデオン物語の続きである。この物語の中で、ギデオンは、ミディアン人との戦争に勝利した後、人々から王として治める者となることを求められるが、断っている（士 8:22~23）。にもかかわらず、晩年のギデオンとその息子は「腐敗した王」のように振る舞い、人心掌握に失敗したことが描かれている（8~9章）。

使徒書日課（Iヨハネ 5章より）

- ・「ヨハネの手紙（一、二、三）」は、「ヨハネ福音書」と共に、ひとつの「ヨハネの教会共同体」の中から生み出された文書のひとつで、著者名などは記されていないが、「使徒ヨハネ」あるいは「長老ヨハネ」を指導者とする教会の伝承と共に、新約の中に置かれてきた。
- ・日課箇所は、本書簡のまとめ部分に位置する。ヨハネの教会共同体は、神学的な論争などから分裂・分断を経験してきたと推察されるが、そのような中で、「互いに愛し合う」という相互の実践が疎かにされている問題が著者によって指摘され、「神信仰」「神への愛」の当然の帰結として「互いに愛し合う」という実践を最優先すべきことが繰り返し告げられている。
- ・この「互いに愛し合う」ことは、「ヨハネ福音書」で主イエスが「新しい掟」（ヨハネ 13:34）として示されたことであり、「手紙」中でも繰り返し「掟」として語られている。「掟」と訳されている語（ギリシア語）は「エントレー」で、「聖書協会共同訳」では「戒め」と訳されている。日本

語で「掟」は、一般に「集団の結束を図るために共有されている一般に暗黙の了解(不文律)」を意味するが、「戒」は、「一般に明示的な個人に対する道徳的行動規範」を意味する。一方、「エントレー」は、「指示・命令」の意味で用いられる語であり、「掟」よりは「戒め」の訳語が適当と判断されたのだろう。

・4 節「世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です」は、訳文として意味が取りにくい、文法的には、「世に打ち勝つ勝利」=「わたしたちの信仰」ということ。つまり、「神を信じ、イエスが神の子である」と信じる」とは、「世に打ち勝つ」ことだとされている。このような構図は「ヨハネ文書」で基本的なもので、「世(コスモス)」は「神」に敵対している被造物として位置づけられており、「世」に服するの、それとも「神」に属するのかが、最大の問題として捉えられているのである。

福音書日課(ヨハネ 7 章より)

・日課箇所は、主イエスがエルサレムに滞在された「仮庵祭」における出来事を伝える一連の物語場面(7~10 章)の初めである。「仮庵祭」は、三大祭の一つで、出エジプト後の荒れ野の生活を想起するときとして秋に祝われてきた。この祭に付随するようにして記念されるのが「大贖罪日」で、今日のユダヤ教徒にとっては重要な「悔い改めの日」として位置づけられている。主イエスの時代のエルサレム神殿では、「逾越祭」や「七週祭」などと共に、盛大な演出を盛り込んだ祭典・祭儀が催されていたと伝えられている。

・日課箇所の冒頭部分では、仮庵祭に合わせてエルサレムに「上るかどうかが」問題とされ、主イエスが兄弟たちと対話されている。聖書では、「エルサレム」に行くことを「上る」と表現する(「上京」「上洛」などと同じような表現)。一方、「ヨハネ福音書」は、「上る」を、単純にエルサレムに行くことを指す場合にも当然用いるが、「十字架に上げられる」「天に上げられる」という表現でも多用し、象徴的な意味を持たせている。この場面で、主イエスが、兄弟たちに対して「わたしはこの祭りには上って行かない」と言われながら、ひそかに上って行かれたと描かれるのは、主イエスが兄弟たちを欺いたということではなく、「わたしはこの祭りには、《十字架／天》には上って行かない」と宣言されたものとして(一種の言葉遊び的に)物語っているのだろう。「わたしの時はまだ来ていない」は、そのような趣旨から理解される。

・5 節「イエスを信じていなかった」は、逐語的に訳すと「彼に対して信頼していなかった」。「信じる」は、(英語の believe と同様)、目的語を直接取るか、前置詞で取るか、どのような前置詞で取るかによって、ニュアンスが異なってくる。ここでは、弟たちが、主イエスの行動や言動についてではなく、その人格に対する信頼を寄せているかどうかが表示されている。

来週の誕生日 (8月16日~22日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-205 番「今日は光が」(=□2 番、□55 番)は、19 世紀英国教会司祭の J.エラートンがチェスター大聖堂用の讃美歌集のために作詞した、主日の意義を歌う讃美歌。曲は、「幼子の日(無辜の聖嬰兒の記念日)」のための讃美歌に付けられたものを転用。
- ・21-161 番「見よ、主の家族が」(=□39 番)は、詩編 133 の「見よ、兄弟たちが共に座っている。なんとこの恵み、なんとこの喜び」を歌うもので、ユダヤ教会の典礼歌の形式に倣った讃美。
- ・21-471 番「勝利をのぞみ」(=□134 番、□164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讃美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、教会の讃美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讃美歌集では採用されなくなっている。ワシントン大行進(1963 年 8 月 28 日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。

21-205「今日は光が」

This is the day of light

1. This is the day of light — / let there be light today! / Arise, O Christ, to end our night / and chase its gloom away.
2. This is the day of rest — / our inner strength renew; / on lives by many cares oppressed / send your freshening dew.
3. This is the day of peace — / with peace our spirits fill; / bid all the blasts of discord cease, / the waves of strife be still.
4. This is the day of prayer - / let earth to heaven draw near! / Lift up our hearts to seek you there; / come down to meet us here.
5. This is the first of days: / come with your living breath / and wake dead souls to love and praise, / O Victor over death!

(*Hymns for Today's Church (2nd ed.) #380*)

21-471「勝利をのぞみ」

We shall overcome

1. We shall overcome, we shall overcome,
we shall overcome someday!
Oh, deep in my heart I do believe
we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.

(*The United Methodist Hymnal #533*)